

かみ やま
上 山 遺 跡 群

2006.3

長野県飯田市教育委員会

かみ やま
上 山 遺 跡 群

2006.3

長野県飯田市教育委員会

序

上山遺跡群が位置する鼎地区は、飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川の河岸段丘に発達した地域です。地区内には、旧石器時代から人々の生活の痕跡が見られ、特に段丘の上段部に大規模な集落が多数営まれています。

鼎地区は、飯田市街地に近いことや農業後継者の不足等から、最近では宅地化が急速に進んでおります。また、道路も国道153号飯田バイパス等が建設されるなど交通の便も改良され、日に日にその姿を変えております。今次調査された場所も県道拡幅工事の予定地であり、その一端を示しています。

しかし、このような変化の中でも文化財の保護という面も考えなければならず、時として相容れない事態に直面することがあります。それ故、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることも止むを得ないことといえましょう。

今回の調査では平安時代の住居址が7軒発掘され、人々が古くからこの地で生活していたことがわかつきました。

文化財の保護と活用は、文化財行政の大きな課題です。幸い市民の皆さんの活発な生涯学習・地域学習の中で、自分たちの先人が残した文化財や地域の歴史を学びたいという欲求は大きくなっています。私たち文化財行政・教育行政に携わる者はこのような要望に応え、市民の皆さんにご理解をいただきながら、一体となった取り組みができるよう一層の努力をしていかなければなりません。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめとして、本調査に関係された全ての方々に深く感謝を申し上げます。

平成18年3月

飯田市教育委員会

教育長 伊澤宏爾

例　　言

1. 本書は、県道下山妙琴原線拡幅工事に先立ち実施された、飯田市鼎地区所在の埋蔵文化財包蔵地上山遺跡群の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田建設事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成16年度に現地調査、平成17年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
4. 現地での調査は坂井勇雄・佐々木嘉和が担当し、整理作業は坂井勇雄が担当した。
5. 発掘調査及び整理作業にあたり、遺跡略号に地番を付しKKM3578を用いた。また、遺構については右記の略号を使用している。 竪穴住居址—SB
6. 土層の色調、土性については、小山正忠・竹原秀男 2005『新版標準土色帖』を用いている。
7. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により、坂井勇雄が行った。
8. 本書は坂井勇雄が執筆・編集し、馬場保之が校閲した。
9. 調査にあたり、基準点測量をエムツークリエーションに委託した。
10. 遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は西大寺フォト 杉本和樹氏に委託した。
11. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004-1 飯田市考古資料館に保管している。

目　　次

序	② 2号住居址	12
例言	③ 3号住居址	12
目次	④ 4号住居址	14
第1章 経過	⑤ 5号住居址	14
第1節 調査に至るまでの経過	⑥ 6号住居址	14
第2節 調査の経過	⑦ 7号住居址	14
第3節 調査組織	(2) その他	14
第2章 遺跡の環境	第4章 まとめ	19
第1節 自然環境	写真図版	
第2節 歴史環境	報告書抄録	
第3章 調査結果		
第1節 調査区の設定		
第2節 基本層序		
第3節 遺構・遺物		
(1) 竪穴住居址		
① 1号住居址		12

第1章 経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成16年4月2日付けで飯田市追手町2-678 飯田建設事務所長 野間広一郎より、飯田市上山3578番地他における県道下山妙琴原線改良工事にかかる土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書が提出された。

当該地は埋蔵文化財包蔵地「上山遺跡群」の一画に位置する。本遺跡群内においては、昭和59年～平成4年度にかけて道路改良工事、店舗建設に先立つ発掘調査が断続的に行われており、主に平安時代の遺構・遺物が確認されている。このような埋蔵文化財の状況のため事業実施に先立ち予備調査を行い、その結果に基づいて改めて協議することとなった。

諸協議を経て、平成16年6月22日、予備調査に着手し、重機によるトレンチ調査を行った。用地内の数箇所を調査し、翌23日に予備調査を終了した。調査の結果、平安時代の竪穴住居址と中世の柱穴群、遺物を確認した。

予備調査終了後に再度開発側と協議をした結果、遺構・遺物が確認された地点を中心に発掘調査を行い、記録保存をすることとなった。

第2節 調査の経過

以上の経過を経て、平成16年8月17日、飯田市追手町2-678 飯田建設事務所長 小林正登と飯田市長 田中秀典の間で「平成16年度 県単街路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託」を締結した。その後8月19日、委託期間に関する変更受託契約を締結した。

用地買収終了後の平成17年1月13日より現地での調査を開始した。今次調査区は大きく5箇所に分かれ、それぞれの調査区が住宅地と隣接しているため排土置場が限られ、一部の調査区に関しては2回に分けて調査を進めていく事とした。その為、5箇所の調査区を3回に分けて発掘調査を実施した。

1期目は13日から26日にかけて1区・2区・3区西側・4区の調査を実施した。2期目は27日より1期調査区の埋め戻しを経て、3区東側・5区東側の調査を2月9日まで実施した。3期目は10日より2期調査区の埋め戻しを経て、最終5区西側の調査を22日まで実施した。それぞれの調査においては、季節柄天候の影響を受けたが、委託基準点設置作業、遺構の掘り下げ作業、測量調査、写真撮影等を行い、また、調査終了間近の2月19日には、地元上山公民館において発掘調査報告会を開催し、地元の方々を中心に約50人の参加を得た。その後、2月23日、重機による最終埋め戻し作業を経て、現地における全ての調査を終了した。調査終了後は、飯田市考古資料館において、出土遺物や現地で記録された図面・写真類の基礎的整理作業を行った。

翌平成17年度は、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測・写真撮影作業・第2原図の作成・トレース・版組等を行い、発掘調査報告書を刊行した。



挿図1 調査遺跡位置図

(1) 調査日誌

- 平成17年1月13日（木） 重機による表土剥ぎ
- 1月14日（金） 重機による表土剥ぎ・基準点設置・機材搬入
- 1月17日（月） （1期調査開始）テント設営・1～4調査区検出作業
- 1月18日（火） 1区ピット掘り下げ・3区SB02床面精査
- 1月19日（水） 1、2区ピット掘り下げ・3区SB02床面精査・4区SB01掘り下げ
- 1月20日（木） 1区ピット掘り下げ完了・2区実測・3区SB02掘り下げ・4区SB01掘り下げ
- 1月21日（金） 1、2区全景写真・3区出土長頸壺取り上げ・4区SB01床面精査
- 1月24日（月） 3区SB02、カマド写真撮影・4区SB01写真撮影
- 1月25日（火） 3区SB02カマド調査・4区基本層序実測
- 1月26日（水） 3区SB02カマド調査（1期調査終了）
- 1月27日（木） 重機による埋め戻し及び表土剥ぎ
- 1月28日（金） 基準点設置
- 1月31日（月） （2期調査開始）3区SB02延長部検出・5区検出作業
- 2月1日（火） 積雪のため作業中止
- 2月2日（水） 積雪のため作業中止
- 2月3日（木） 3区SB02掘り下げ・5区検出作業
- 2月4日（金） 3区SB02掘り下げ・5区ピット掘り下げ
- 2月7日（月） 3区SB02写真撮影・5区ピット掘り下げ・全景写真撮影
- 2月8日（火） 雨のため作業中止
- 2月9日（水） 3区全景写真撮影（2期調査終了）
- 2月10日（木） 重機による埋め戻し及び表土剥ぎ
- 2月14日（月） （3期調査開始）基準点設置・5区西側検出作業
- 2月15日（火） 竪穴住居址と思われる遺構を複数確認
- 2月16日（水） 雨のため作業中止
- 2月17日（木） SB03掘り下げ・SB04内ピット掘り下げ
- 2月18日（金） SB03、04写真撮影・SB05、06掘り下げ
- 2月19日（土） 午前 上山公民館にて発掘調査報告会を実施（参加者 約50名）
- 2月21日（月） 調査区全景写真撮影・調査機材撤収
- 2月22日（火） 調査機材撤収
- 2月23日（水） 重機による埋め戻し作業 現地における全ての調査を終了する



挿図2 調査位置及び周辺遺跡地図

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 富田泰啓（～平成17年3月3日）
伊澤宏爾（平成17年3月4日～）

調査担当者 坂井勇雄 佐々木嘉和

調査員 馬場保之 濵谷恵美子 下平博行 羽生俊郎

現地作業員 伊藤孝人 木下貞子 木下義男 杉山春樹 竹本常子 橋千賀子 服部光男
松下成司 三浦照夫

整理作業員 金井照子 小平まなみ 中村地香子 橋本宣子 福沢育子 松本恭子
宮内真理子 森藤美知子 吉川悦子

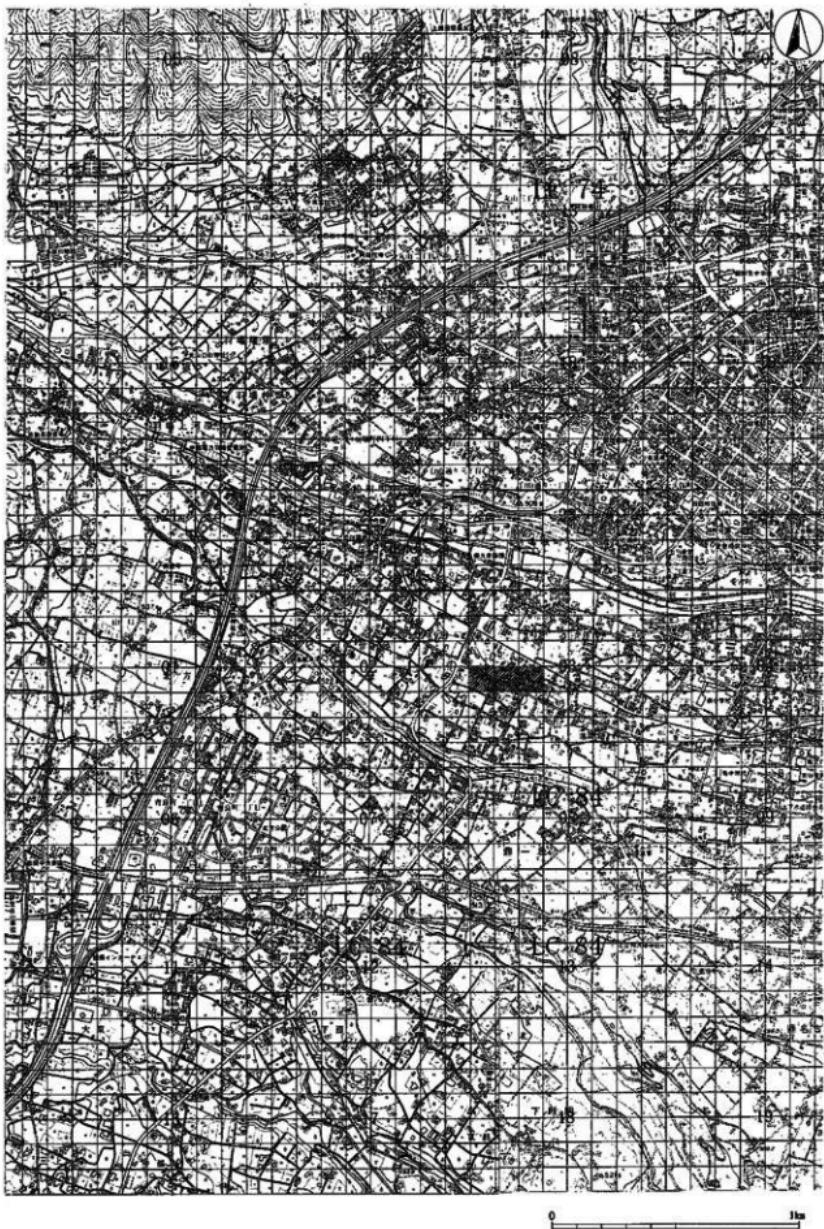
(2) 事務局

飯田市教育委員会 教育次長 尾曾幹男（～平成16年度）
中井洋一（平成17年度～）

生涯学習課長 小林正春

文化財保護係長 吉川 豊（～平成16年度）馬場保之（平成17年度～）

文化財保護係 宮澤貴子（平成17年度～）濱谷恵美子 佐々木行博（～平成16
年度）下平博行 羽生俊郎（平成17年度～）



挿図3 基準メッシュ図区画調査位置

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

上山遺跡群は、飯田市鼎地区に所在する。鼎地区は元々鼎町であったが、昭和59年12月に飯田市と合併し現在に至る。ここは飯田市街地の南西側を流れる飯田松川の対岸に位置し、飯田松川に沿った細長い地区である。西側は伊賀良地区に接し、南東側は松尾・上郷地区に接する。

飯田市は、西を木曾山脈、東を赤石山脈と伊那山脈に挟まれた伊那谷の南部に位置し、天竜川による河岸段丘が著しく発達した地域である。市内はこの河岸段丘がさらに大小の支流により開析され、扇状地・河岸段丘・小盆地が複雑に入り組み、変化に富んだ地形が形成されている。鼎地区は、中央アルプスの前山山麓に形成された扇状地を飯田松川が開析した段丘地形上に立地し、基本的には3つの段丘面により構成される。最上位の一色面・名古熊北原面・八幡面は中位段丘に区分され、標高500m前後に笠松山系から発達した扇状地形の末端がある。中位段丘より大きな段丘崖で一段低くなる切石・上山面は砂質ローム、砂礫層を主体とする低位段丘に比定され、下山面に連続する。この北側はやや規模の小さい段丘崖を経て、南条面に対比される段丘面があり、さらに飯田松川の氾濫原へと続く。

当遺跡は、飯田松川により形成された河岸段丘のうちの低位段丘に属する切石・上山面上に位置する。遺跡の南側には、飯田松川流域の河岸段丘を低位段丘面と中・高位段丘とに分ける、比高差25mの段丘崖があり、飯田松川寄りの北側にも比高差10m程の段丘崖が存在し、地形が区切られる。南側の段丘崖下には、湧水線の存在が知られている。北東側へは上山・切石段丘面が飯田松川の上流に向かって狭まりながら伸び、南東側は飯田松川と天竜川の合流地点に向かって開けている。遺跡は標高約490mの微高地を中心に広がり、この微高地上のごく緩やかな南東斜面が今回の調査地点にあたる。

第2節 歴史環境

鼎地区的遺跡を概観すると、ほぼ全面的に包蔵地である。古くは旧石器時代までさかのぼり、断片的な資料ではあるが、天伯B・猿小場遺跡からナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、地区内全域に遺跡が存在していることが確認されている。しかし、その内容はそれぞれ時期によって異なっている。天伯A遺跡・六反畠遺跡等では押型文土器片の出土があり、早期・前期の遺跡・遺物の分布は複数の遺跡で認められるが、集落址の調査例は前期初頭の竪穴住居址が6軒調査された田井座遺跡に限られる。安定した遺跡の姿を捉えることになるのは、中期になってからである。主に低位・中位段丘上の各所に相当規模の集落が分布しており、これまでに天伯A・柳添遺跡等が調査されている。後期・晩期になると他地域と同様に遺跡数・規模とも減じ、猿小場・山岸・六反畠遺跡で断片的に調査されているにすぎず、具体的な状況は不明である。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。該期の集落展開としては、低位・中位段丘崖下の湧水線及び低位段丘中央に発達する湿地帯を利用した水田經營と中位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。後期前半では猿小場・山岸遺跡で竪穴住居址が調査されている。後期後半になると、調査面積の大小等の問題はあるものの、調査区内に住居址が密集する大規模な集落

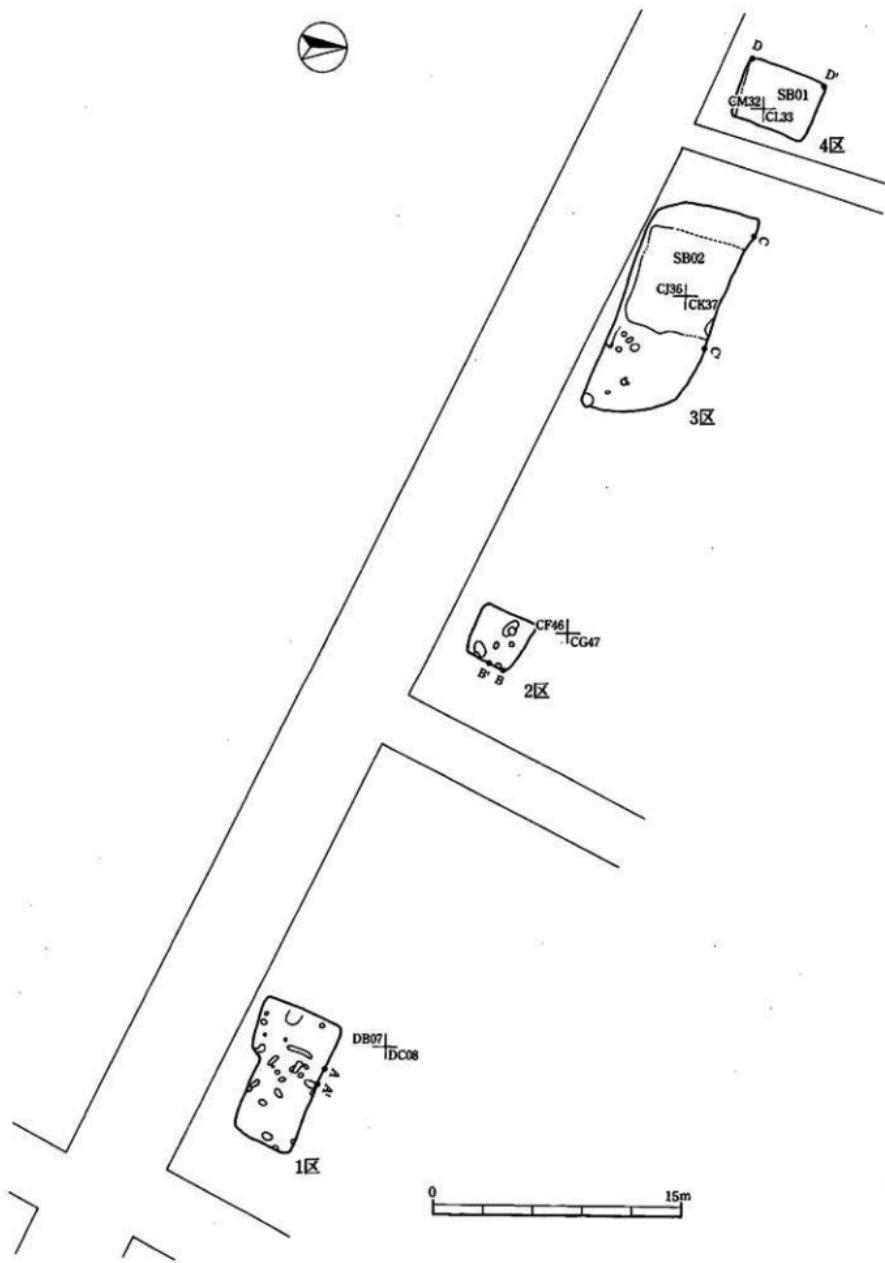
址と、住居址が散在する集落址という大きく2つの類型が見られる。前者は低位段丘面の山岸遺跡に代表され、後者は中位段丘面から扇状地上に多く、田井座遺跡があげられる。それは、前述の基盤となる生業形態の相違と関わるものと考えられる。田井座遺跡では、後期前半に小規模な集落が始まり、後半期に一定規模の集落として安定した姿をみせ、弥生時代の終焉とともに集落も廃絶したことが判明している。

古墳時代の様相は、前期にあたる状況がほとんど不明であり、わずかに、山岸遺跡にその一端をうかがえる程度である。後期になると、調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸・天伯B・六反田・黒河内遺跡がある。また、この時代の集落址以外の特徴的なものとして古墳がある。鼎地区には現在消滅したものを含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は前期に属する物見塚古墳、後期の天伯1号・2号古墳がある。物見塚古墳は、竜丘兼清塚古墳や松尾妙前大塚古墳等とともに当地方における初現期の古墳であり、埋葬施設として削竹形木棺の痕跡が確認されている。当地方では初めて、埋葬後に墳丘が構築された古墳であることが確認され、方形周溝墓の構築方法との関連が注目される。また、周溝内からは殉葬されたと考えられる馬の臼歛や轡が出土しており、当地方最古の殉葬馬と考えられている。隣接する松尾地区では、平成5年度に調査された一般国道153号線飯田バイパス路線内の茶柄山9号古墳で、周溝内の8基の土坑に馬が殉葬されているのが確認され、また、茶柄山2号古墳でも三環鉢が装着された状態で殉葬されたと考えられる馬の臼歛が土坑内から出土しており、古墳時代以降馬の生産が物見塚古墳周辺の八幡原地籍で行われたことを示唆する状況証拠が揃いつつある。

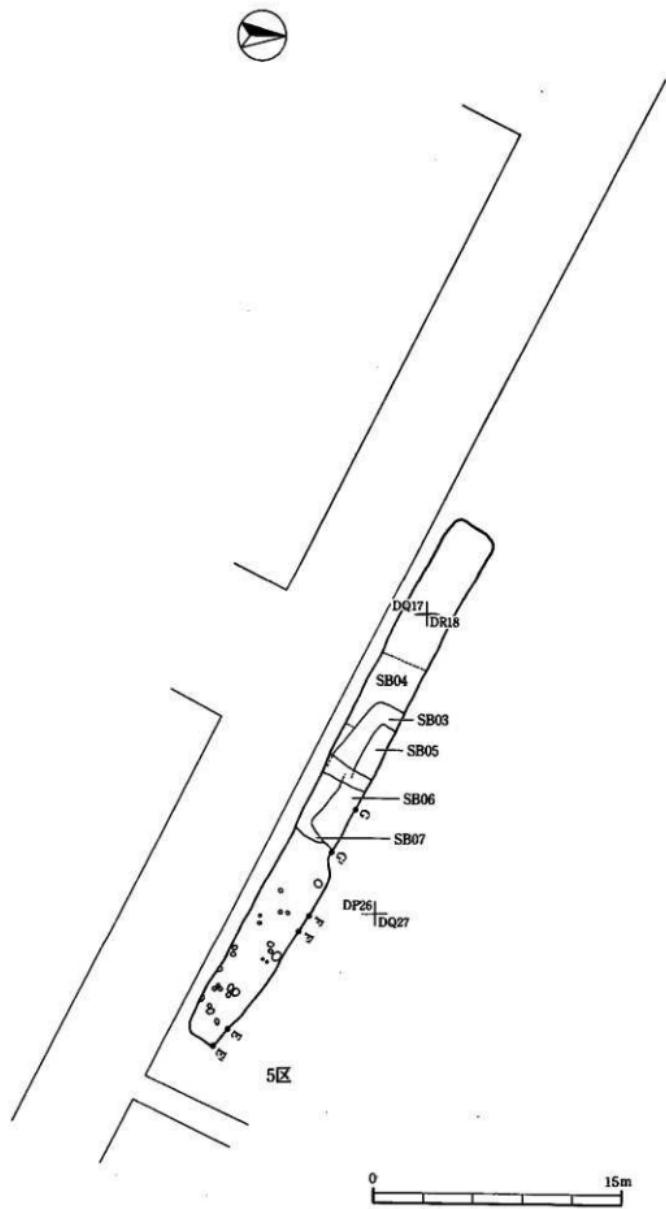
奈良時代の鼎地区の状況は不明であるが、古墳時代後期を含め奈良・平安時代以降、隣接する松尾・伊賀良地区において、東山道の経路及び「育良駅」の所在地、莊園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、当地区においてもそれらとの関連を考える必要がある。

平安時代の集落址は地区内全域に分布しており、猿小場遺跡では9世紀後半を中心に25軒と多くの竪穴住居址が検出されている。しかし、一般的には遺跡単位では住居址は少なく、むしろ散在する分布状態をみせている。また、日向田遺跡では平安時代後期の住居址から墨書き土器が出土しており、前述の伊賀良地区等との関連が暗示される。なお、平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中世の住居址も検出され、猿小場遺跡では16軒の住居址が調査されており、そこには集落の安定・継続した姿を読み取ることができる。田井座遺跡では、工房址と考えられる方形竪穴が1基確認されており、竪穴内には大きな穴が4基掘り込まれており、このうち3基が一線に並ぶ。うち1基からは常滑大甕が出土しており、形態等から文永寺石室五輪塔下部から出土した12世紀代の常滑大甕との類似性が指摘されている。この時期の大甕が畿内を中心として納経容器やその外容器として用いられた例が多いことからすれば、相当希少であったことは想像に難くない。この他、田井座遺跡、一色遺跡では溝址や小柱穴群が調査されており、中世前半の居館の可能性が指摘されている。

以上、鼎地区的遺跡を中心に各時代を概観したが、古来より重要な役割を果たした地域といえる。



挿図4 遺構分布図(1)



挿図5 遺構分布図(2)

第3章 調査結果

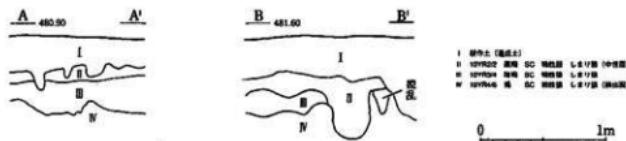
第1節 調査区の設定

調査区の設定は、世界測地系に基づく新飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図により設定した。今次調査区は、LC84 3-25 26 27 に位置する。(挿図3)

第2節 基本層序

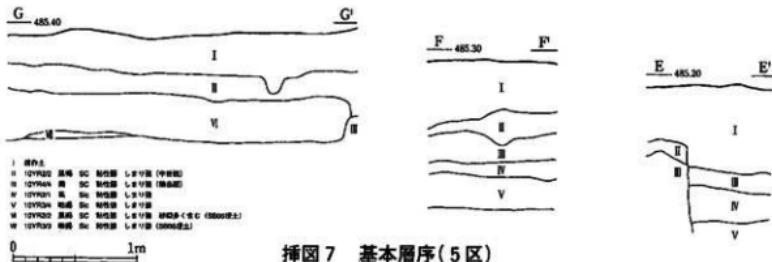
今次調査区の地形は、北西から南東にかけて緩やかに傾斜する微高地上にあり、場所によって層位が異なっていた。今回の調査区内では1~4区と5区で層位が異なる。(挿図6、7)

1~4区は、今次調査区の南東側に位置し、基本的には旧耕作土及び造成土の下に黒褐色土、暗褐色土、砂質の褐色土が見られた。1、2区ではこの黒褐色土面から掘込まれる小穴が壁面上で観察されており、穴の形状から中世の面である可能性が高い。この層は3区、4区では擾乱等の影響を受けており確認されなかった。1~4区における調査では砂質の褐色土層を遺構検出面とし、この面で平安時代の1~2号住居址を調査した。



挿図6 基本層序(1区・2区)

5区は、今次調査区の北西側に位置し、今回の調査区内で最も標高が高い地点である。この調査区では耕土の下に黒褐色土、褐色土、黑色土、暗褐色土の堆積が見られ、この黒褐色土面から掘り込まれている穴の形状から中世面と考えられる。この層は部分的には確認されない地点があるが、G地点からE地点にかけて徐々に傾斜しながら確認されており、1~2区で確認された中世の面へ続く層である。5区の調査では下層の褐色土層を遺構検出面とし、平安時代の3~7号住居址を調査した。この面の下層で確認されている黒色土層も部分的に掘り下げて調査したが遺構・遺物は確認されなかった。



挿図7 基本層序(5区)

第3節 遺構・遺物

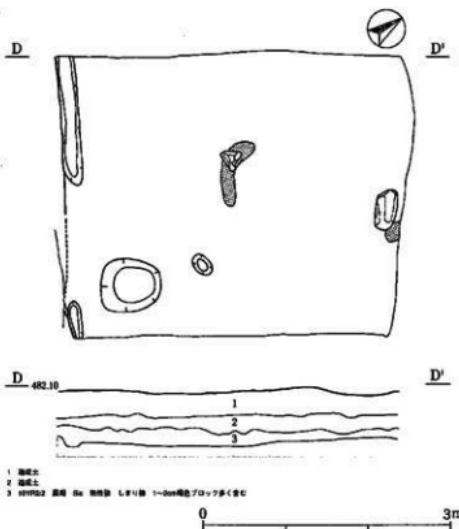
(1) 竪穴住居址

① 1号住居址 (SB01 挿図8)

遺構 4区内、CL32を中心に検出した。予備調査時に確認されていたが、調査区全域が住居址内に位置し、平面形、規模、主軸方位は不明である。検出面から床面までは約20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に堅固な貼床がされており、中央部、及び北側で焼土塊がみられた。住居址内の施設としては、南側の壁下で周溝、ピットが検出されているが、主柱穴であるかどうかは不明である。カマド等は調査区内で確認されなかった。

遺物 (挿図13) 破片資料であるが、長胴甕、須恵器杯、灰釉陶器が出土している。

時期 9世紀代に比定される。



挿図8 SB01

② 2号住居址 (SB02 挿図9)

遺構 3区内、CI37を中心に検出した。1号住居址同様予備調査時に確認された。排土の関係上北側と南側を2回に分けて調査した。北側の一部が調査区外になるため、全体の3分の2を調査した。主軸方位はN110°Eで、平面形は方形を呈し、規模は5.5m×(4.9m)である。南側での調査では埋土から検出され、検出面から床面までは約21cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は全体的に堅固な貼床がされている。住居址内の施設としては、南側で周溝、ピットが検出されているが、主柱穴は不明である。カマドは東側壁面の中央部で確認され、構築部材であった石材や土師器の甕が出土している。また、カマドの南側には貯蔵穴と思われるピットが検出され、そこからはほぼ完形の須恵器長頸甕が出土している。

遺物 (挿図13) 須恵器長頸甕以外は破片資料が多く、長胴甕、杯、黒色土器杯、須恵器杯が出土している。

時期 9世紀代に比定される。

③ 3号住居址 (SB03 挿図10)

遺構 5区の西側、DP21を中心に検出した。北側が調査区外となり、また、南側が擾乱をうけているため全体の4分の1を調査した。4号、5号住居址を切る。平面形は方形を呈すると思われるが、規模、主軸方位は不明である。検出面から床面までは約32cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址内では3基のピットが検出されている。

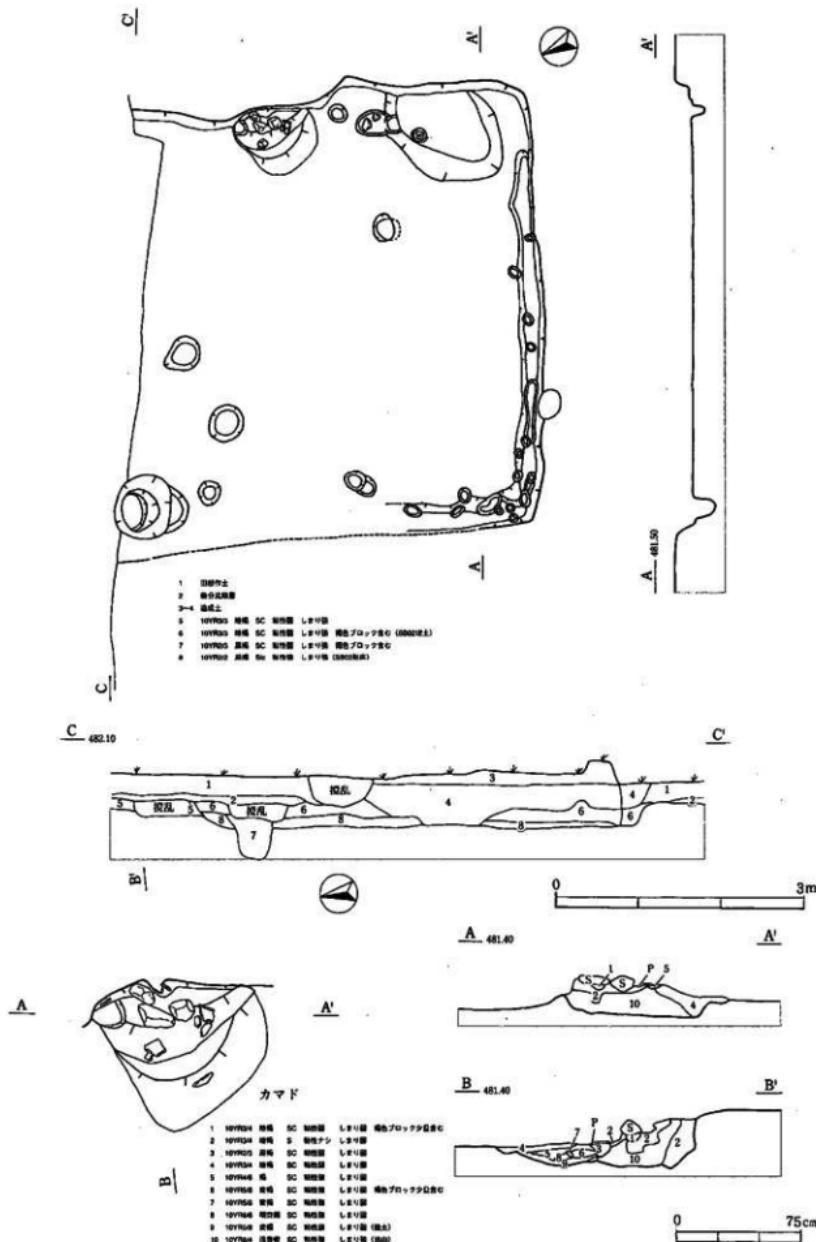


図9 SB02

遺物 (挿図13) 遺物は少なく、破片資料で長胴甕が出土している。

時期 9世紀代に比定される。

④ 4号住居址 (SB04 挿図10)

遺構 5区の西側、DQ19を中心に検出した。北側、南側の一部が調査区外となり、全体の3分の1を調査した。3号住居址に切られる。検出プランが不明確なためその平面形、規模、主軸方位は不明であるが、残存する床面の範囲から東西方向の長さ5.3mを計る。床面上では多数のピットを検出したが、主柱穴は不明である。南側の調査区壁面上でカマドの一部と思われる焼土等の痕跡が確認された。

遺物 (挿図13) 破片資料であるが、長胴甕、杯、須恵器杯が出土している。

時期 9世紀代に比定される。

⑤ 5号住居址 (SB05 挿図11)

遺構 5区の西側、DP21を中心に検出した。北側が調査区外となり、南側が搅乱をうけているため全体の5分の1を調査した。3号住居址に切られる。平面形、規模、主軸方位は不明である。検出面から床面までは約12cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址内では3基のピットが検出されている。

遺物 (挿図13) 遺物は少なく、器形不明の土師器片が出土している。

時期 9世紀代に比定される。

⑥ 6号住居址 (SB06 挿図11)

遺構 5区の西側、DO23を中心に検出した。北側の一部が調査区外となり、また、西側が搅乱をうけているため全体の4分の1を調査した。7号住居址を切る。平面形、規模、主軸方位は不明である。東側の一部で壁面がみられ、検出面から床面まで約18cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物 (挿図13) 遺物は少なく、僅かに長胴甕片が出土している。

時期 9世紀代に比定される。

⑦ 7号住居址 (SB07 挿図11)

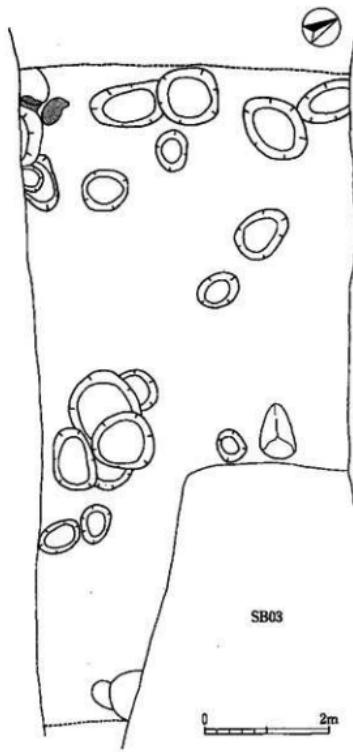
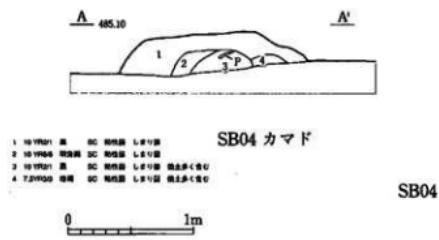
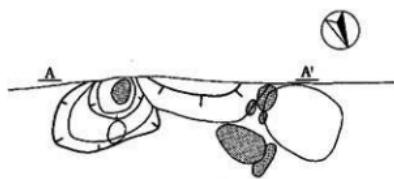
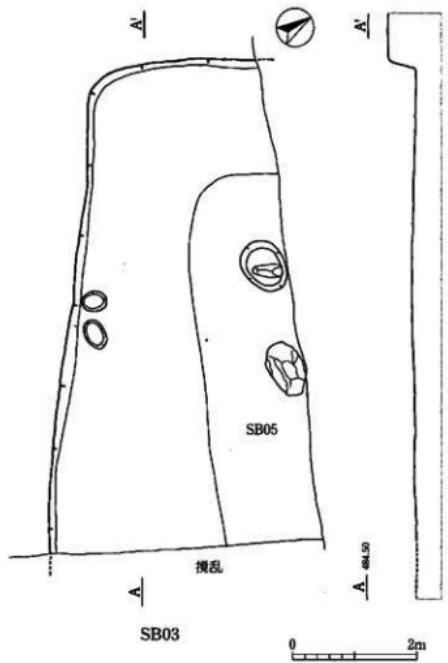
遺構 5区の西側、DO22を中心に検出した。6号住居址同様南側の一部が調査区外となり、また、西側が搅乱をうけているため全体の4分の1を調査した。6号住居址に切られる。平面形、規模、主軸方位は不明である。東側の一部で壁面がみられ、検出面から床面まで約14cmを計る。壁は緩やかに立ち上がる。床面上では2基のピットが検出された。

遺物 遺物は少なく、僅かに長胴甕片が出土している。

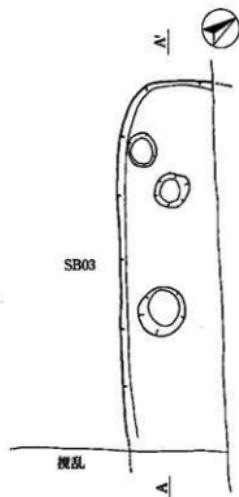
時期 9世紀代に比定される。

(2) その他

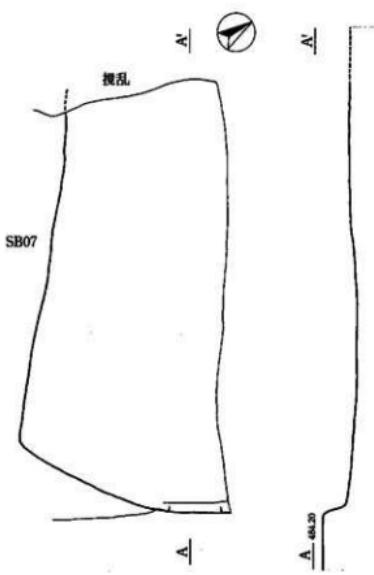
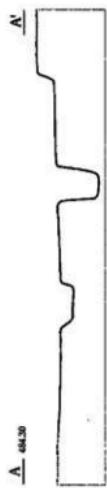
1、2、5区より中世の据立柱建物址と思われる柱穴を検出した。特に5区東側に多く、予備調査時には「カワラケ」(挿図13)が出土している。調査区が狭く、建物址は組めなかった。



挿図10 SB03・04



SB05



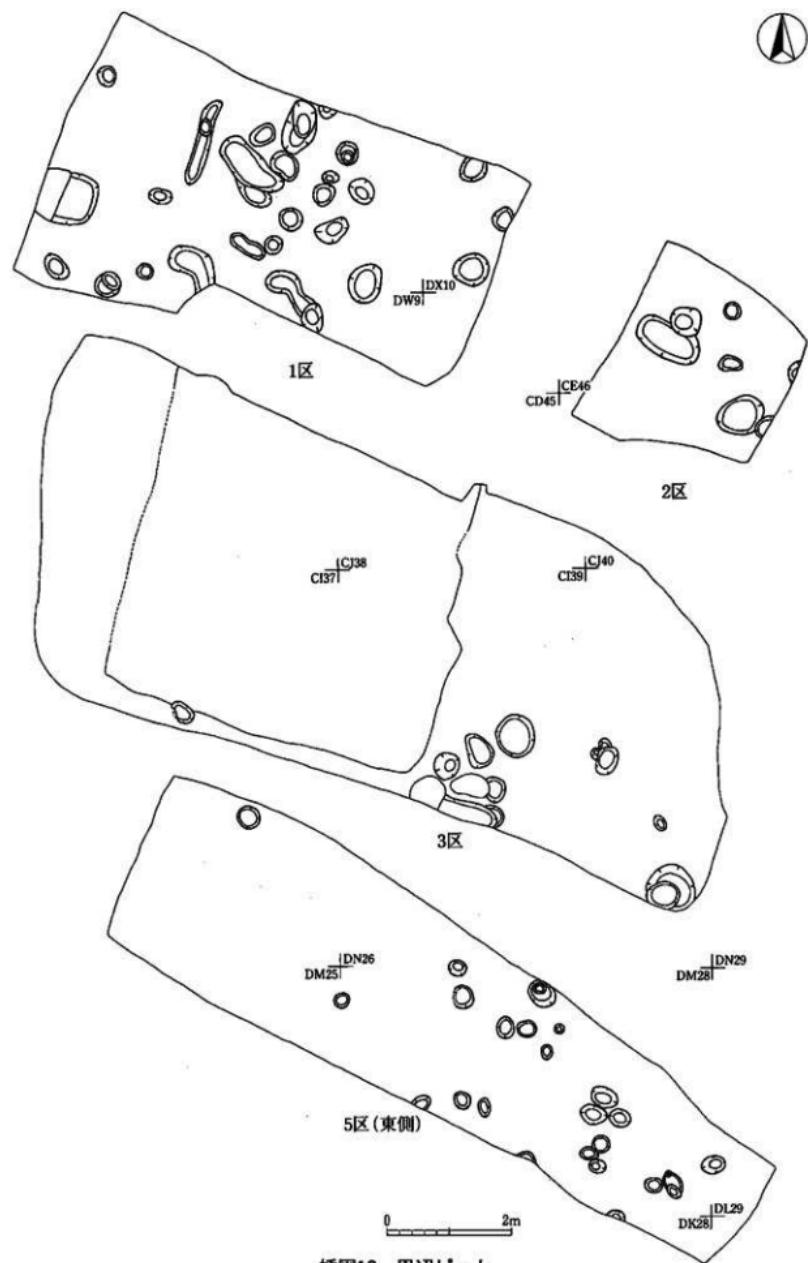
SB06



SB07



攝図11 SB05-06-07



挿図12 周辺ピット

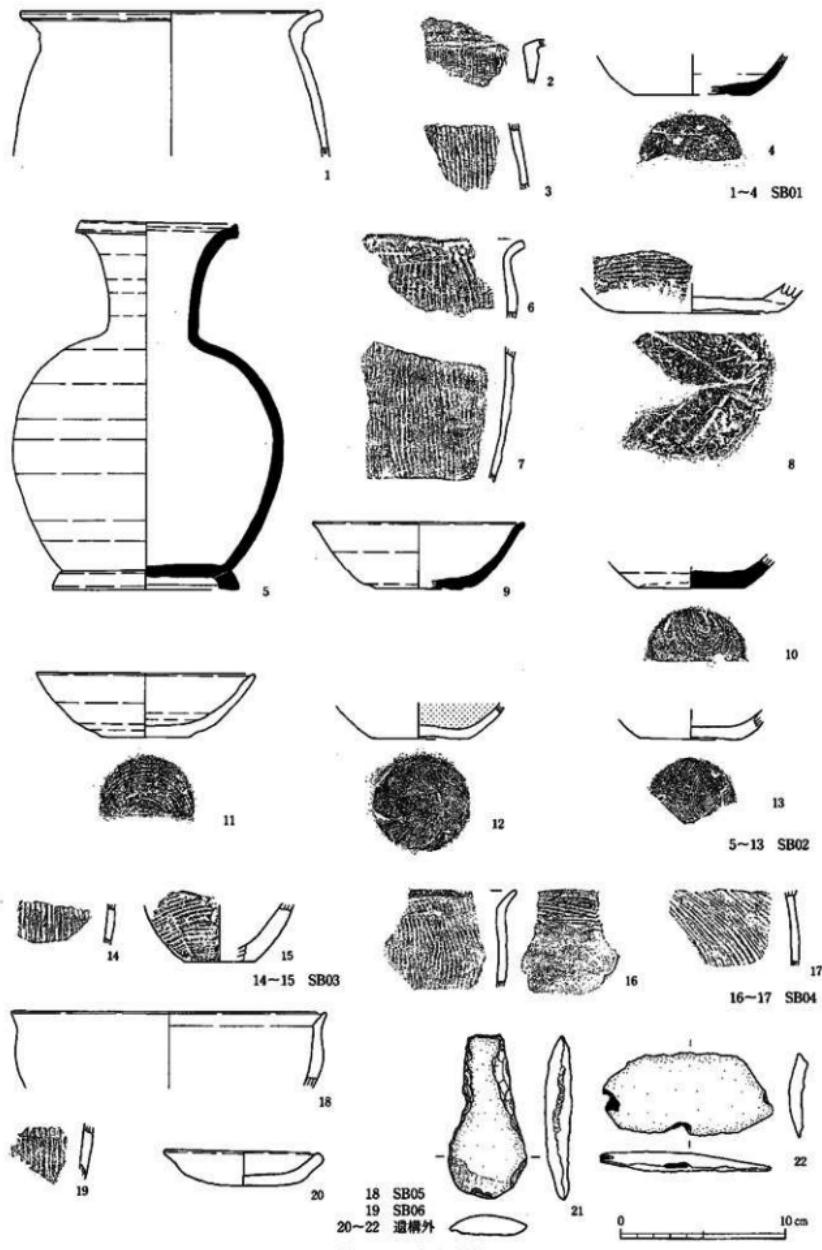


插圖13 出土遺物

第4章 まとめ

第1節 遺跡周辺の状況

上山遺跡群は、「日向田遺跡」「上の平遺跡」「上山堂垣外遺跡」「柳添遺跡」「上山代田遺跡」から成る遺跡群で、今次調査区は日向田遺跡と切石遺跡群の六反畠遺跡と隣接する。

日向田遺跡は、今次調査区の南側に位置する微高地上に立地する遺跡である。これまで昭和59・60年度の旧鼎町時代に町道建設に先立つ発掘調査がされ、平安時代後期の竪穴住居址が1軒調査されている。また、平成元年・4年度にはこの旧町道に隣接した場所で店舗建設に先立つ発掘調査がされており、平安時代後期を中心とした竪穴住居址が7軒調査されている。これらの遺構の存在から、周辺に平安時代後期の集落が営まれていたことが推測されている。遺構が検出された場所は、西から東へ続く微高地上であり、その北側は昭和59年度の調査で湿地帯であることが確認されている。また、南側は比高差10mの段丘崖となり湧水線の存在が知られている場所であり、このような低湿帯を利用して食糧が生産され集落が継続して営まれていたといえる。

一方六反畠遺跡は、今次調査区の西側に位置し、日向田遺跡北側の湿地帯のさらに北側に形成されている微高地上の上に立地する遺跡である。ここでは、昭和63年度の店舗建設に先立つ発掘調査、平成5年度の県道改良工事に先立つ発掘調査がされており、主に縄文時代後晩期の土坑、古墳時代後期の竪穴住居址3軒が確認されている。日向田遺跡とは遺構の時期が異なるが、狭い微高地上に集落が立地し、周辺の湿地帯で食糧が生産されている点は類似している。

第2節 今次調査区の様相

今次調査区は六反畠遺跡の東側に隣接する場所であり、同じく西から東へ続く僅かな微高地上の上に位置する。遺構が確認された場所は、東側の3・4区と西側の5区であり、中世と思われる小柱穴と、平安時代と思われる竪穴住居址が7軒確認された。

平安時代は今次調査区の主体となる時代である。確認された7軒の竪穴住居址は、東側の3区で1軒、4区で1軒検出され、5区で5軒が重複して検出された。これらの出土遺物は、2号住居址以外は破片資料が多く詳細な時期を決めるものが少ないが、全体的に、器面をハケ目で調整する長胴甕が多く見られた。それに地元産と思われる須恵器が多く含まれ、灰釉陶器の出土が少なかった。これは日向田遺跡出土の該期住居址と同じ状況であり、遺構の時期はおよそ9世紀代と考えられる。また、遺構が確認された位置を見ると、5区と4区の間は予備調査時に遺構の存在が確認されていない状況から、大きく1～2号住居址が調査された東側と、3～7号住居址が調査された西側に分けることが出来る。東側では、2号住居址が比較的遺構の残存状態がよく、出土遺物も多かった。また、カマドが東壁に構築されており、周辺の竪穴住居址の多くが北西側にカマドを構築しているのに対し特徴的である。西側集落については、竪穴住居址が重複するうえ、限られた調査範囲のためそれぞれ全体の3分の1未満での検出であった。重複の様相から数時期の時期差が考えられるが、出土遺物が断片的であり、詳細は不明である。この西側集落の住居址では明確なカマドが検出されていないが、東壁にその痕跡が見られないことから

西壁に構築されている可能性が高く、この点からも東側集落との時期差が考えられる。調査区のすぐ北側は比高差10mの段丘崖であり、現在の県道より南側は湿地帯と考えると集落の立地場所は僅かな微高地上である。このような場所に長期間集落を営めることができたのは、南側に広がる湿地帯を利用した食料生産が背景にあるためである。

中世の遺構については、主に5区東側の調査区内で検出されており、道路拡幅工事という性格上調査範囲が限られていたため建物址としては把握出来なかった。これらに伴う遺物も予備調査時に確認した「カワラケ」1点のみであり、詳細は不明である。ただ、調査区西側の六反畝遺跡における昭和63年度調査では、該期の具体的な遺構は確認されていないが、常滑窯等の陶器片、青磁破片、白磁破片等が出土しており、周辺に支配者層の館跡の存在を推測している。該期における鼎地区は、伊賀良庄の一部であり、小笠原氏の居城である松尾城にも近い位置にある。遺跡の性格については、今後の資料の増加を待って検討すべきであるが、重要な役割を持った遺跡の一つであることは確かである。

今回の調査では、古墳時代以後も9世紀代に数時期の変遷を持つ集落址が低位段丘面北側微高地上に営まれていたことが判明した。これは低位段丘面南側微高地上の日向田遺跡の集落とほぼ同時期であり、この時期切石・上山段丘面の同じような微高地上には幾つもの集落が営まれていたといえる。古墳時代以前は、その耕地における生産力の限界からこの異なる微高地を移動しながら集落を営んでいたと推測されているが、平安時代以降生産技術が向上し、複数の場所に集落が存在した事実を示している。

参考文献

- 飯田市教育委員会 1985 「町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書（鼎 日向田遺跡）」
飯田市教育委員会 1989 「六反畝遺跡」
飯田市教育委員会 1990 「日向田遺跡Ⅰ」
飯田市教育委員会 1994 「日向田遺跡Ⅲ」
飯田市教育委員会 1995 「六反畝遺跡Ⅱ」
鼎町史編纂委員会 1989 「鼎町史」



遺跡遠景



調査前風景



SB01



SB02(北側)



SB02(南側)

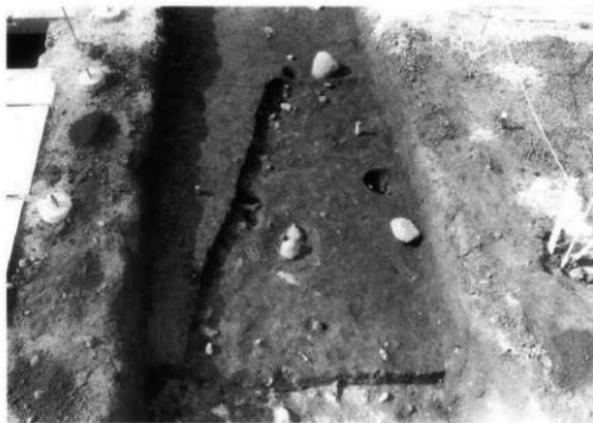


カマド



遺物出土状況

図版 4



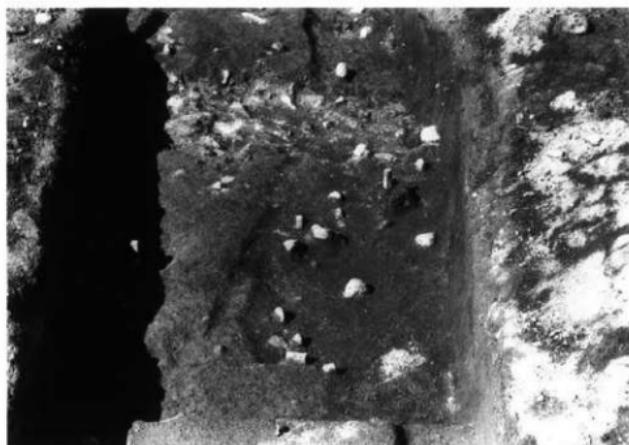
SB03



SB04



SB05



5区(東側)柱穴群



1区 全景



2区 全景



3区 全景



5区 全景



重機作業風景



委託測量風景



作業風景



SB02 出土遺物



SB02 出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみやまいせきぐん						
書名	上山遺跡群						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
編著者名	坂井勇雄						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 TEL0265-22-4511						
発行年月日	西暦2006年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみやま いせきぐん 上山遺跡群	いいだし かなえ 飯田市鼎	20205	35° 30' 17"	137° 48' 58"	平成17年 1月13日 から 平成17年 2月23日	200m ²	県道拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
上山遺跡群	集落址	平安時代 中世	住居址 7軒 小柱穴多數		土師器 須恵器	平安時代の 集落址	

上山遺跡群

発行日 平成18年3月24日

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534
飯田市教育委員会

印刷・製本 ヨシザワ印刷株式会社

